

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和 7 年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第 3 号（6 月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401
南さつま市金峰町大野 2200
TEL:099-245-1081（代表）
099-245-1157（直通）
FAX:099-245-1149



ホームページアドレス：<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujoshou/index.html>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp

農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

- | | |
|--------------|---|
| 1. 使用する人の安全 | 使用者自身の健康管理，安全使用 |
| 2. 作物に対する安全 | 適期，適正防除で薬害防止 |
| 3. 農産物に対する安全 | 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守) |
| 4. 環境に対する安全 | 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川，湖沼，海等への汚染防止)
(養蚕，養蜂等への危被害防止) |
| 5. 保管管理の安全 | 保管管理の徹底で事故防止 |

農薬ラベルを確認しましょう

農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう

令和7年度 病虫害発生予報 第3号

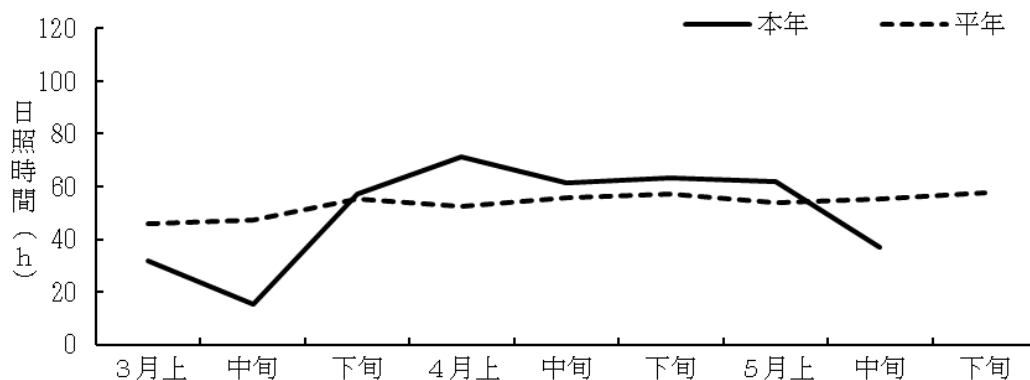
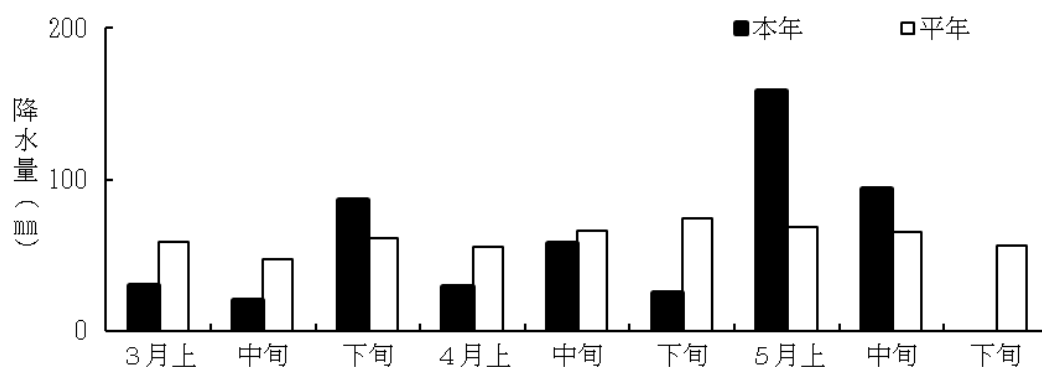
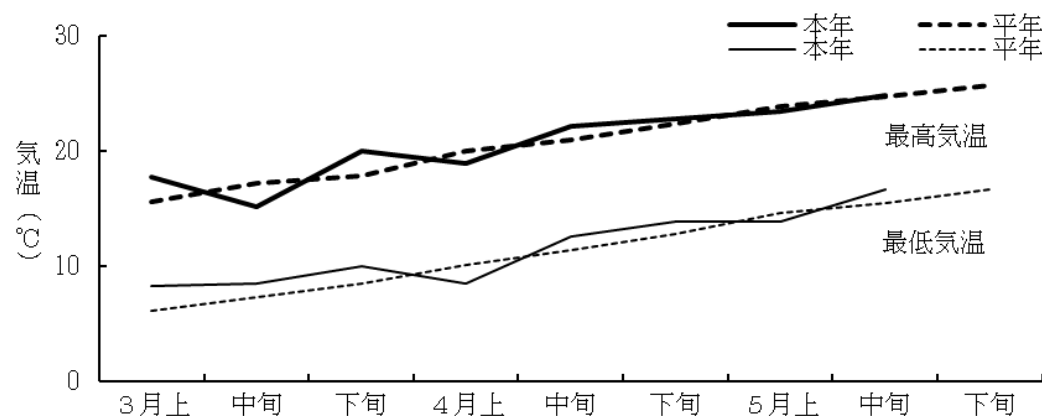
令和7年5月30日
鹿児島県病虫害防除所

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（5月31日から6月30日） 令和7年5月29日 鹿児島地方気象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	20	30	50	気温は九州南部、奄美地域とも高く、降水量は九州南部は平年並みか多く、奄美地域はほぼ平年並、日照時間は九州南部、奄美地域ともほぼ平年並。
	奄美地方	10	30	60	
降水量	九州南部	20	40	40	
	奄美地方	30	40	30	
日照時間	九州南部	40	30	30	
	奄美地方	30	40	30	

II. 2～4月の気象情報（鹿児島地方気象台 観測点：加世田）



【 病 害 虫 発 生 予 報 の 概 要 】

作 物		病 害 虫 名	発 生 量	
			現 況	予 報
普通作物	早期水稻	いもち病	並	並
		紋枯病	並	並
野菜	イチゴ（苗床）	ハダニ類（県本土）	やや少	並
花き	キク（施設）	白さび病（県本土）	やや少	やや少
		ハダニ類（県本土）	並	やや多
		アザミウマ類（県本土）	少	やや少
果樹	カンキツ	そうか病（県本土・熊毛地域）	やや少	やや少
		〃（奄美地域）	並	並
		かいよう病（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	並	並
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	少	少
		〃（奄美地域）	並	並
茶樹	チャ	炭疽病	やや少	並
		輪斑病	やや少	並
		チャノコカクモンハマキ	並	やや多
		チャハマキ	並	やや多
		チャノホソガ	多	多
		チャノミドリヒメヨコバイ	多	多
		チャノキイロアザミウマ	並	やや多

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 普通作物

1. 早期水稻

(1) いもち病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率 0 % (平年 0.5 %)

：並

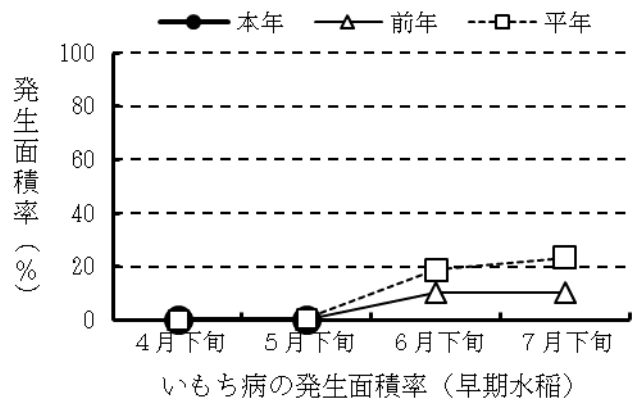
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 葉いもちの発生が穂いもちの発生につながりやすいので、早期発見に努め、発生を認めたら、直ちに防除を行う。

(イ) 出穂期が梅雨期間にあたるので、常発地では粒剤による予防散布が効果的である。

(ウ) 穂いもち防除は穂ばらみ後期に行うが、時期を失しないよう注意する。

(エ) 窒素質肥料の多用は発生を助長するので、各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。



(2) 紋枯病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率 0 % (平年 0 %) ：並

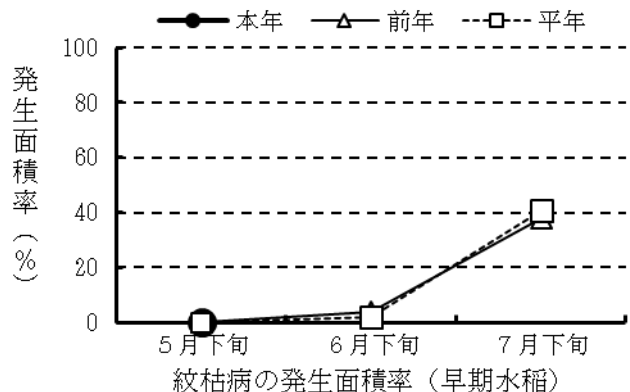
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 防除は上位葉鞘への進展期にあたる
出穂 1 週間前から出穂期頃に行う。

(イ) 窒素質肥料の多用は発生を助長する

ので、各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。

(ウ) 過繁茂状態の水田や前年に多発した水田では、発生が認められたら病勢の進展に注意する。



(3) 海外飛来性害虫の飛来状況

ア セジロウンカの初誘殺日

(ア) 予察灯 5 月 26 日現在、誘殺あり 5 月 17 日 (平年：5 月 7 日)

(イ) 大型吸引トラップ 5 月 26 日現在、誘殺なし (平年：5 月 19 日)

イ コブノメイガの初誘殺日 (フェロモントラップによる調査は、H30 年から開始)

(ア) フェロモントラップ 誘殺なし (R2：5/20, R3：5/18, R4：5/7, R5：5/22, R6：5/27)

ウ 予察灯等への海外飛来性害虫の誘殺状況は、病虫害防除所のホームページで確認するとともに、本田の見廻りを行い発生に注意する。

表1 予察灯(60W白熱電灯)でのウンカ類の誘殺状況(農業開発総合センター内:水田)

月/日	4/1~5/3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
セジロウンカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
トビイロウンカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
月/日	5/17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
セジロウンカ	1	1	0	0	0	0	0	0	0					
トビイロウンカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0					

注) 調査開始日は、4月1日。

表2 大型吸引トラップでのウンカ類の誘殺状況(農業開発総合センター内)

月/日	4/1~5/3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
セジロウンカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
トビイロウンカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
月/日	5/17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
セジロウンカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
トビイロウンカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0					

注) 調査開始日は、4月1日。

表3 フェロモントラップでのコブノメイガの誘殺状況(農業開発総合センター内:水田)

月/日	5/1~5/3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
コブノメイガ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
月/日	5/17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
コブノメイガ	0	0	0	0	0	0	0	0	0					

注) 調査開始日は、5月1日。

防除に関する今月の留意事項



1. サトウキビ黒穂病(令和7年度技術情報第4号, 令和7年5月23日付参照)

(1) 発生状況等

ア 令和7年5月16~23日に調査した熊毛・奄美地域における発生ほ場率は、奄美大島0.6%、喜界島1.4%、沖永良部島3.3%であった。なお、種子島、徳之島、与論島では発生が認められなかった。

イ 発生ほ場の発生程度はすべて少発生で、発生が多い作型は「株出」であった。

ウ 発生確認品種は「農林27号」「農林23号」及び「農林30号」であった。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発病株は鞭状物の出現前に、ほ場外に持ち出し、適正に処分する。

イ 鞭状物が出現した茎は、胞子の飛散を防ぐために、ビニール袋をかぶせて抜き取り、適正に処分する。

ウ 多発ほ場や放棄ほ場は早急に更新する。

エ 抵抗性品種を植え付けるようにする。

オ 発病ほ場や隣接ほ場から採苗しない。また、来歴の明らかな苗を使用する。

カ 植付け時に苗の消毒を行う。

Ⅱ. 野 菜

1. イチゴ（育苗）

（1）ハダニ類

ア 予報内容

（ア）発生地域 県本土

（イ）発生量 並

イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 29%（平年 40%）：並

発生程度は低い（－）

（イ）気象予報

気温：高い（＋）

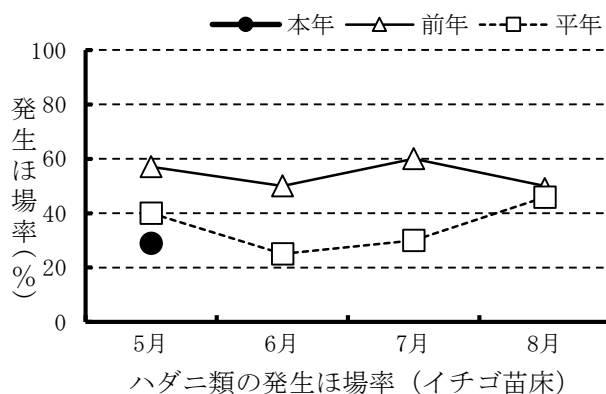
ウ 防除上注意すべき事項

（ア）下葉や寄生葉は摘葉し、ほ場外に持ち出し処分する。

（イ）農薬の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。

（ウ）農薬によっては感受性が低下しているので、散布後は防除効果を確認する。

（エ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。



防除に関する今月の留意事項

1. バレイシヨの収穫後の耕種的病害対策

収穫残さが次作での疫病，菌核病，軟腐病及びそうか病等の一次伝染源になるので，収穫後は以下のほ場管理を適切に行う。

（1）収穫後の発病茎葉やいも，くずいも等は，ほ場および畦畔外に持ち出し，適切に処分する。

（2）イネ科牧草等の作付けによる輪作に努める。

Ⅲ. 花き

1. キク

(1) 白さび病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 0 %（平年 6 %）

：やや低い

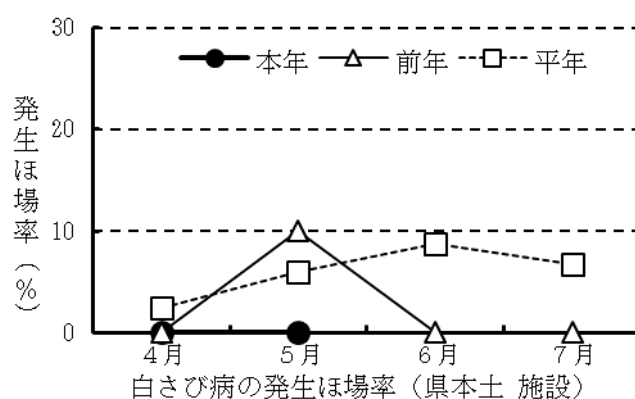
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発病葉は、早めに摘み取って施設外へ持ち出し、適正に処分する。

(イ) 通風換気に努め、過湿にならないようにする。

(ウ) 母株からの持込みを防ぐため、予防散布と初期防除を徹底し、無病穂の育成に努める。

(エ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。



(2) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 40 %（平年 35 %）

：やや高い

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

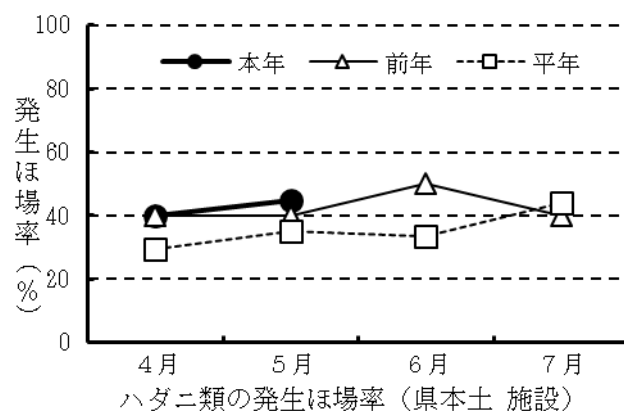
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生する場合がありますので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。

(イ) 薬液は葉裏までよくかかるように散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。



(3) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：少

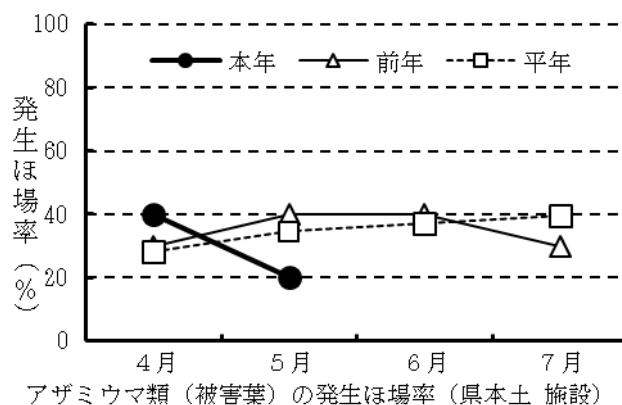
発生ほ場率 20 %（平年 34 %）：低い

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類の発生動向を把握するためには、出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。なお、クログハナアザミウマの誘引効率はやや低いと思われる。



- (イ) クロゲハナアザミウマは中下位葉に主に寄生しているため、よく観察して早期発見に努め、発生が認められた場合は、薬液が中下位葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
- (ウ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。
- (エ) アザミウマ類は、キクえそ病の病原ウイルス（TSWV）とキク茎えそ病の病原ウイルス（CSNV）を媒介するため、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。
- (オ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。
- (カ) 母株や苗は導入時に、アザミウマ類の寄生やウイルス病の発生がないか確認し、持ち込まないようにする。

IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) そうか病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや少

奄美地域 並

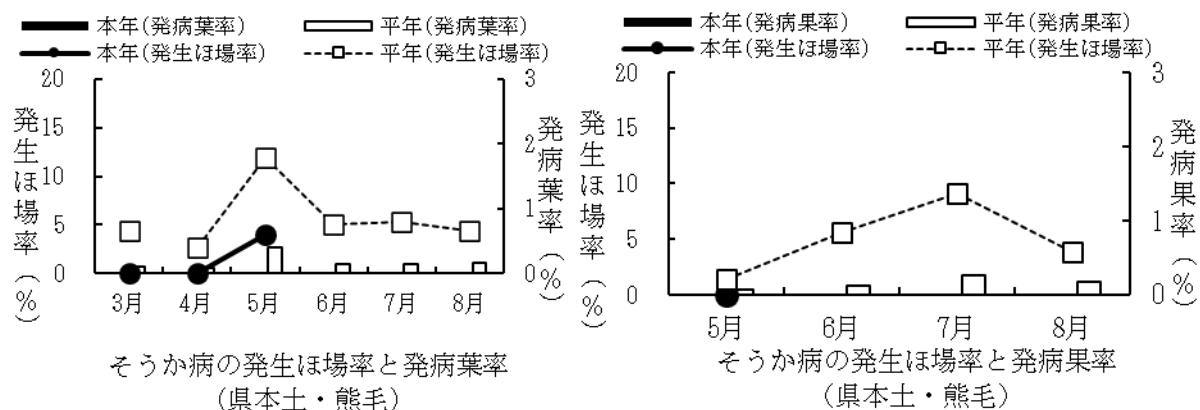
イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	やや少
発生ほ場率	4 % (平年 11%) : やや低い	0 % (平年 1 %)
発病率	0 % (平年 0.3%) : やや低い	0 % (平年 0 %)

※果実調査は平年より開花期が遅れたため、温州 6 / 8 ほ場、甘夏 6 / 12 の結果を示す。



<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	並
発生ほ場率	0 % (平年 11%) : 並	0 % (平年 0 %) : 並
発病率	0 % (平年 0.4%) : 並	0 % (平年 0 %) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発病葉，発病果は伝染源となるので，ほ場外に持ち出し処分する。

(2) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 並

イ 予報の根拠

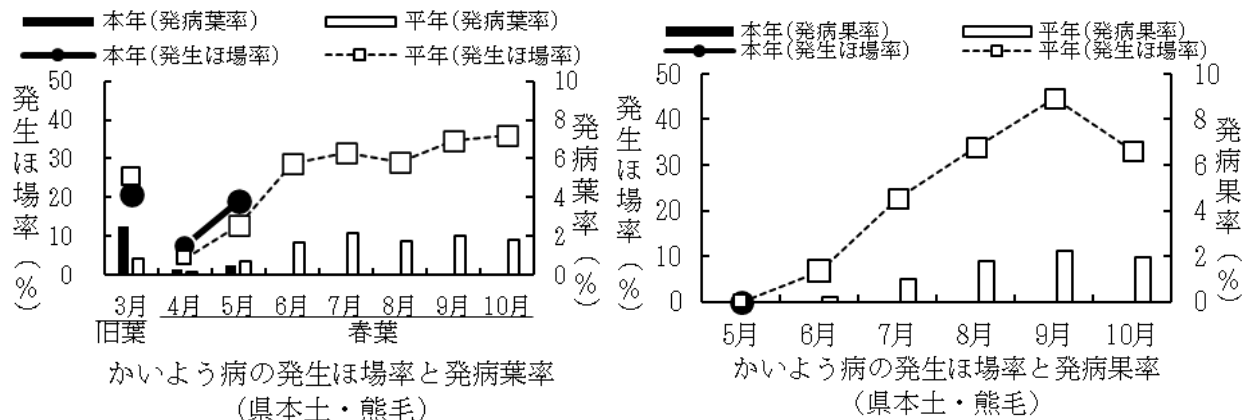
<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発 生 量	並	並
発生ほ場率	19% (平年 13%) : やや高い	0% (平年 0%) : 並
発 病 率	0.5% (平年 0.5%) : 並	0% (平年 0%) : 並

※果実調査は平年より開花期が遅れたため、温州 6/8 ほ場、甘夏 6/12 の結果を示す。

春葉での発生程度は低い (ー)



<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発 生 量	やや少	並
発生ほ場率	0% (平年 6%) : やや低い	0% (平年 0%) : 並
発 病 率	0% (平年 0.1%) : やや低い	0% (平年 0%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 感染前の防除効果が高いので、予防散布に努める。

(イ) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、ミカンハモグリガの防除に努める。

(ウ) 強風雨等により葉や果実に生じた傷口から感染するので、防風網の設置や防風樹の管理に努める。

(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発 生 量

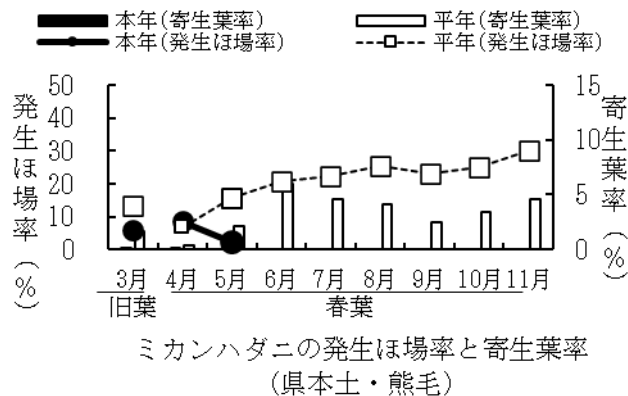
県本土・熊毛地域 少

奄 美 地 域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量 : 少
発生ほ場率 2% (平年 16%) : 少
寄生葉率 0% (平年 2.4%) : 少



<奄美地域>

- (ア) 調査結果（春葉） 発生量：並
発生ほ場率 0 %（平年 1 %）：並
寄生葉率 0 %（平年 0 %）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 1 葉当たり雌成虫数 0.5～1.0 頭（寄生葉率で 30～40%）を目安に防除する。
(イ) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、春期～夏期にかけては、マシン油乳剤（97%）を主体とした防除を行う。

防除に関する今月の留意事項

1. カンキツ

(1) 黒点病

- ア 本病は落花直後～梅雨期に感染が多くなる。
イ 薬剤防除は累積降水量 200～250mm を目安とするが、近年、数日でこの雨量を超える場合が多い。
ウ 薬剤散布間隔は気象情報に留意し、簡易雨量計等の園内設置により防除の目安とする。
エ 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。

(2) ゴマダラカミキリ

- ア 成虫は5月下旬から発生し、6月上旬～中旬が羽化最盛期になる。
イ 産卵は6月中旬頃から始まり7月上旬が盛期で、8月まで続く。
ウ 朝夕、成虫の活動が緩慢な時間帯に捕殺する。卵・幼虫の圧殺・刺殺の効果は確実である。
エ 樹冠下の除草は、産卵防止に効果的である。
オ 幼木の主幹地際部を物理的に遮断（ストックカバー法）すると、成虫の産卵を防止できる。

ゴマダラカミキリの発生ステージ別防除方法

時 期	5 月	6 月	7 月	8 月
	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下
生 態				
物理的 防除法				
生物的 防除法				
化学的 防除法				

※県本土の発生ステージを示す

V. 茶 樹

1. チャ

(1) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生は場率 28% (平年 48%)

：やや低い

1 m²当り病葉数 0.9 枚 (平年 3.5 枚)

：やや少

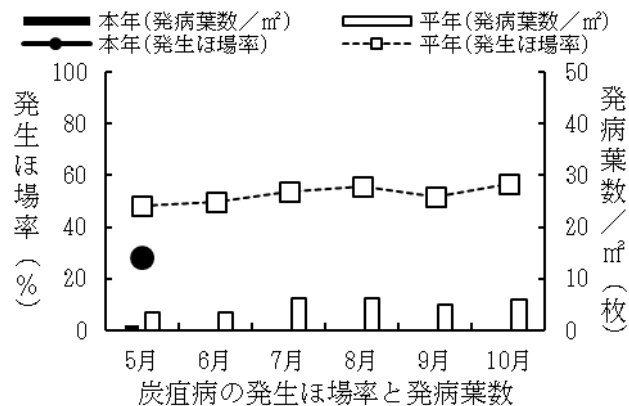
(イ) 気象予報

降水量：平年並か多い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 摘採残葉での発生に注意し、本病に弱い品種や多発は場では、三番茶萌芽～1葉期に防除する。

(イ) 多発状態の続く茶園は、三番茶後に整・剪枝 (深刈り等) により伝染源を除去する。



(2) 輪斑病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生は場率 0% (平年 6%)

：やや低い

1 m²当り病葉数 0 枚 (平年 0.2 枚)

：並

(イ) 気象予報

降水量：平年並か多い (+)

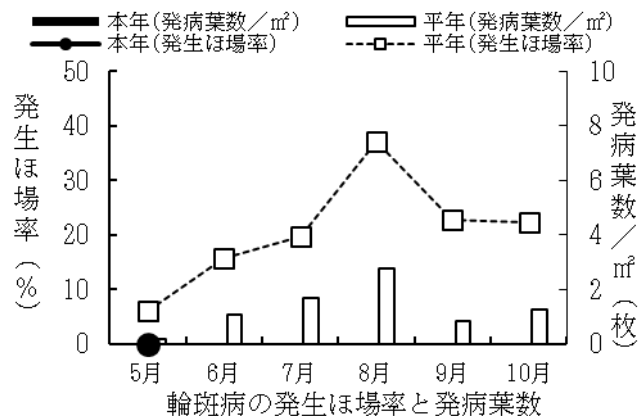
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 二、三番茶の摘採期に降雨が多い場合は、摘採残葉の発病に注意する。

(イ) 農薬に保護殺菌剤を使用する場合は摘採直後に、浸透移行性の農薬を使用する場合は摘採3日後までに散布する。

(ウ) 摘採直後に防除できなかった場合は、摘採7日後までに整枝または刈番茶を摘採し、その直後に防除を行う。ただし、降雨時はできるだけ摘採や整枝を行わない。

(エ) ストロビルリン系農薬に対する効果が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。



(3) チャノコカクモンハマキ, チャハマキ

ア 予報内容

(ア) 発生地域	県本土
(イ) 発生量	チャノコカクモンハマキ やや多
	チャハマキ やや多

イ 予報の根拠

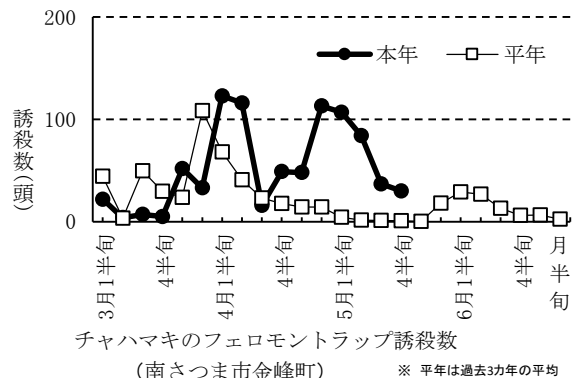
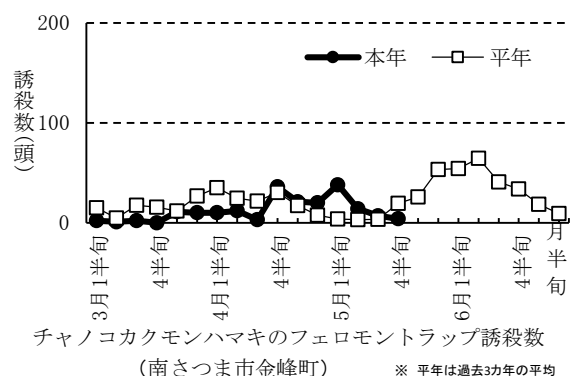
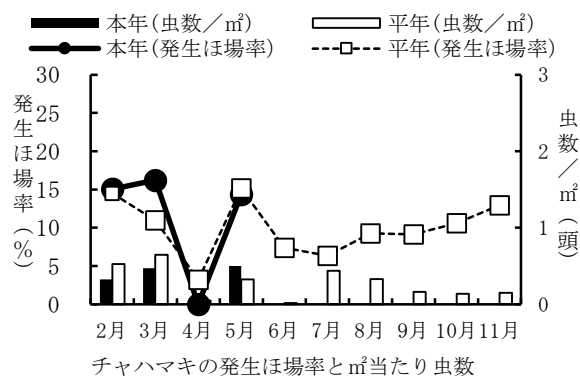
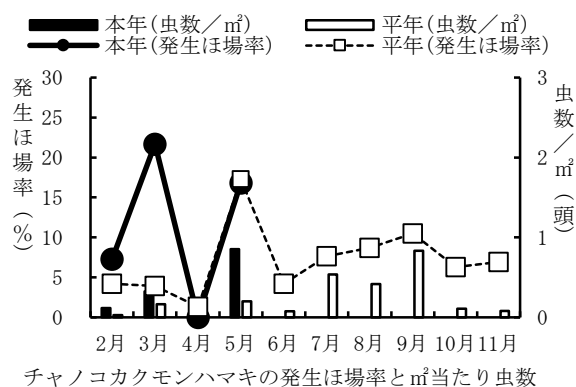
(ア) 調査結果

	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
【巡回調査】		
発生量	並	並
発生ほ場率	17% (平年17%) : 並	14% (平年15%) : 並
m ² あたり虫数	0.9頭 (平年0.2頭) : 多	0.5頭 (平年0.3頭) : やや多
【南さつま市金峰町のフェロモントラップ】		
誘殺数 (3月1半旬~5月4半旬)	191頭 (平年257頭)	846頭 (平年446頭)

※平年は、過去3カ年の平均

(イ) 気象予報

気温：高い (+)



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多発園では、摘採後早めに防除を行う。また、農薬の使用にあたっては、使用基準を遵守し、収穫前の隣接茶園へのドリフトがないように十分に注意する。
- (イ) 一部でジアミド系農薬に対する感受性が低下しているので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。

(4) チャノホソガ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

調査結果 発生量：多

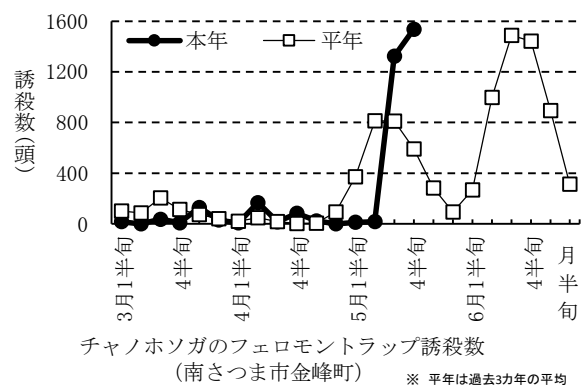
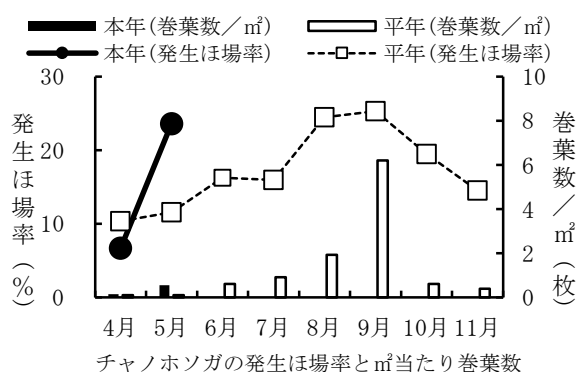
【巡回調査】

発生ほ場率 24% (平年 12%) : 高い

m²当たり巻葉数 0.6 個 (平年 0.1 個) : 多

【南さつま市金峰町フェロモントラップ】

誘殺数 (3月1半旬~5月4半旬) 3,406 頭 (平年 3,398 頭) ※平年は、過去3カ年平均



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 三番茶期は、萌芽から摘採までの期間が短いので、農薬の使用時期(摘採前日数)に注意し、収穫前の隣接茶園へのドリフトがないように十分注意する。

(イ) IGR 剤及びジアミド系農薬に対する効果が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。

(5) チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量
チャノミドリヒメヨコバイ 多
チャノキイロアザミウマ やや多

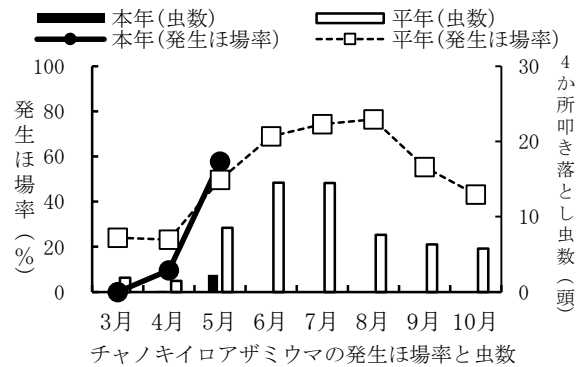
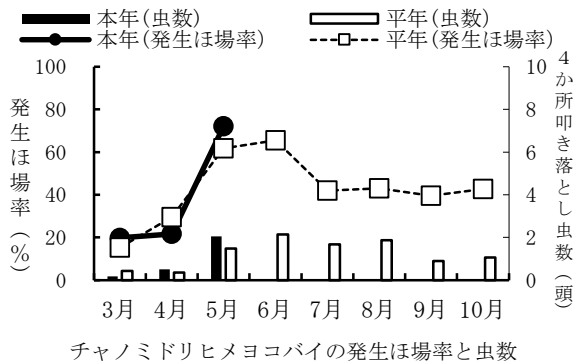
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
【巡回調査】		
発生量	多	並
発生ほ場率	72% (平年 62%) : やや高い	58% (平年 50%) : 並
虫数(4か所たたき落とし)	2.1 頭(平年 1.5 頭) : やや多	2.3 頭(平年 8.5 頭) : やや少

(イ) 気象予報

気温：高い(+)



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 新芽を加害するので、三番茶萌芽期頃に防除する。

防除に関する今月の留意事項

1. 農薬の使用について

近年、てん茶、有機茶、輸出茶等栽培が多様化している。また、近年更新園が多く、更新の時期や程度により防除時期が園地により異なる。このため、農薬を散布する際は、摘採前日数を遵守するとともに、隣接茶園等へドリフトがないように十分注意する。また、摘採前であることを「旗」の設置等により周辺の生産者に知らせるなど、ドリフトが起こらないよう注意喚起を行う。

2. 更新園について

更新園は、芽の再生が園によって異なり生育期間が長く、萌芽～生育初期に病虫害の集中加害を受けやすい。更新後の生育を順調に進めるため、病虫害対策（チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、チャノホソガ、カンザワハダニ、炭疽病、輪斑病、新梢枯死症等）は適切に行う。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。

決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。

2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋等）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. 散布時には農薬がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。
6. クロルピクリン剤は、住宅地及び畜舎に隣接するほ場や、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。
7. 毒性が強い農薬は、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬及び使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等に基づいた総合評価。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平均値を使用。